

学生部ムスタン遠征隊2004登山報告

隊長 和田 岳史



2004年(平成16年)
11月号(No. 714)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-info@jac.or.jp



隊長=和田岳史(23歳・千葉大)、副隊長=吉永岳央(23歳・早大)、加藤健一郎(23歳・立大)、柴田由布子(22歳・学習院大)、古関光浩(19歳・早大)

目次

学生部ムスタン遠征隊2004登山報告	1
海外の山	3
中央分水嶺踏査	4
東海/山形/北海道	
報告	6
自然保護/山研	
支部だより	8
秋田	
東西南北	9
奈良原町子さんの死を悼む/最近のシェルバ事情	
Climbing & Medicine	39
図書紹介	12
新入会員・図書受入報告	13
会務報告	14
INFORMATION	15
ルーム日誌	15

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10~20時
水・金 13~20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10~18時

ネパール・ムスタン地区ダモダールヒマールの未踏峰 Chhiv Himal (6650m) 以降チービヒマールと表記)の初登頂を目指していた学生部登山隊は、9月18日に隊員4名が登頂し、10月3日に全員帰国した。

8月18日に先発2名が、25日に3名がネパール入りし、登山準備を開始した。カトマンズでの準備後、ポカラを経由して、ムスタントレックの拠点となるジヨムソンよりキャラバンを開始する。同地区での荷物輸送の主力となるロバを引き連れ、4000m級の峠を複数越えながら、古都ローマントンへのメインルートをつアランまで進む。ここからメインルートを離れ、進路を東へ、ナムタコラ源頭氷河を目指す。最高で54

00mにもなる峠を、頭痛に悩まされながらいくつも越えて行き、9月8日、BC(5250m)建設。これより氷河左岸の砂礫帯を伝って上流を目指す。9月11日、5650m地点にC1を建設。C1からは対岸のクムルンヒマール(6380m)の絶壁を眺めながら氷河を横断し右岸へ。ここまで来てやっと、目指すチービヒマールが視界に入る。右岸には見事にサイドモレーンが発達しており、我々を目的の場所へと快適に導いてくれた。サリブン(6328m)を左に回り込み、同峰とチービヒマールとの間のコルにC2(6170m・9月15日)を建設した。ここを拠点にチービヒマールは北東稜から、サリブンは南稜からの登頂を目指すことになる。

先にチーブヒマールを片付けることに決め、16日に取り付いた。ルートは岩と氷のミックスから始まり、岩稜、雪稜、急雪壁と変化があつておもしろい。天候は芳しくないが、雲の切れ間にダモダールヒマールの主峰、クムジュンガル(6759m)が馬の背のような容姿を見せ、中国領のカップヒマールがそのピラミダルな山頂を輝かせていた。初日は6400m地点まで。翌17日、天気は昨日よりもさらに悪くなっているが、5人全員でチーブヒマールをアタックする。昨日の最高到達点から緩やかな雪稜を辿り、ナイフリッジから巨大な雪庇を持った雪壁を登る。高度計はすでに6600m近くに近づいており、おそらくこの雪庇の上が山頂なのだろうと期待しながらロープを伸ばしていく。しかし、リッジに上がってみるとまだ緩やかな稜線が続いており、さらに先にはこれまた巨大な雪庇を持ったピークが前方に聳え立っていた。ここまでで、持参したフィックスロープ、スノーバーは全て使い切つてしまつていたので、この日はここまでとした。悪天がそのピークをさらに巨大に見せ、そ



チーブヒマール

の夜は絶望的な雰囲気のまま眠ることになった。

18日、隊員の1名が体調の不良を訴えテントに残ることになった。残念だが、残り4名で昨日までに設置したロープを辿る。昨日の最高到達点からさらに200m以上ロープが必要になりそうなので、ルート下部で比較的安全と思われるピッチのロープ、プロテクションを回収しながら登っていく。天候は昨日同様悪く、風が強いので非常に寒く感じる。昨日の最高到達点より刃渡り状のナイフリッジ、そして雪庇の脇の雪壁を登っていく。2ピッチで少々広いピークに出る、これが山頂だった(13時15

分)。初登頂という意義を感じるよりも、隊員全員にとつての初めてのヒマラヤ峰なので、みな興奮しながら記念写真を撮り、下山した。

19日、今日はサリブンを全員で登ることにする。昨日まで工作のトップに立っていなかった者に工事を任せ、残りの者たちはルートが概ねでき上がるまでC2からその様子を眺める。昨日まで反対側のチーブヒマールからそのルートの全容が見えているので、今日は安心だ。ルートは雪壁から雪稜、氷混じりの雪壁のトラバースから緩いリッジ、そして頂上直下の次第に傾斜をゆるめていく雪面となっている。12時30分、大きな問題もなく5名全員が新ルートからの第2登を果たした。

22日、BCを出発し、バックキヤラバンを開始。帰路は往路とは別のカリガンダキ左岸の道を辿り、ジヨムソンへと帰った。9月末、カトマンズ市内ではバンダ(ゼネスト)が行われていたが、その影響を受けることもなく、10月3日全員で帰国。

今回は現役の大学生だけで隊を構成したが、各々が国内において

それほど先鋭的で困難な登山を行っているわけではない。昔ながらの基本的な合宿(それでも数十年前の方々から見ればお粗末な)を土台に訓練を重ねてきた者たちである。登山歴数年という者でも、過去の登山者が導き出してきた経験則を利用すれば、この程度の結果を出すことができるということ。今回の登山は示しているのではないだろうか。遠征という非常に大掛かりで大変そうだが個人ベール入観があるが、現在では個人ベールのコンパクトな登山が行いやすい環境になっている。思い立ったことを実行に移す、ほんのちよつとの勇気さえあれば、誰にでも憧れの場所に立つチャンスがあるといえる。

今回の遠征に際し、日本山岳会からは100周年記念事業に認定していただき、多大なる資金的な援助をいただいた。学生だけの隊ゆえ多くの方々にご心配をおかけしたことをお詫びするとともに、このような隊を送り出していただいたことに感謝申し上げます。また、今後も学生部活動にご理解いただきますようお願い申し上げます。

海外の山

ホウリーの
ヒマラヤ取材集大成

江本 嘉伸

チョー・オユーを8時間で登ったという米青年が、誇らし気に書いている。私の記録が8千メートルのスピード世界記録であることがリス・ホウリーによって確認された」(10月29日 [Everest News Con])。

エリザベス・ホウリーは記録の「認定者」ともなったようだ。カトマンズに住んで44年、あらゆるヒマラヤ登山を取材し、記録し続けてきたジャーナリスト。1923年11月9日シカゴ生まれ、というから81歳になる。

彼女の集大成というべき仕事「データベース『The Expedition Archives of Elizabeth Hawley』」というCDになって10月、発売された。山名、登山者、登山隊、国籍、シーズン、遭難などから検索できるネパール・ヒマラヤでの登山記録の集大成、まさに「ヒマラヤ生き字引」の仕事である。ホウリー女史と初めて会ったのは、1975年、エヴェレスト日本女子



エリザベス・ホウリー女史
95年、江本撮影

登山隊に同行取材した時だが、その時はロイター通信の現地通信員の肩書きだった。すでに15年カトマンズ暮らしをしていてベテランの風格だった。

1995年に来日した際、インタビューの機会があり、山を仕事の間とする同業者として興味深く話を聞いた。

ホウリーのおもしろいところは、本人は山など登ったこともない、という点だ。

ミシガン大学を卒業したホウリーのジャーナリストとしての初舞台は、1946年、ニューヨークで「フォートチュン」誌で報道と調査をあわせて仕事だった。

11年間働き「ちよつと疲れた」ため同誌をやめ、旅に出た。列車、バスをできるだけ使う「地表をたどる」旅。クリスマスを両親とウィーンで過ごし、列車でイスタンブールへ。中東を知りたくて、イスラエル、

アラブ諸国、イランとまわる。

テヘランからインドのニューデリーに出て、かつての職場の支局長に次はどこへ?と聞かれて「カトマンズ」と答えていた。

ラナ一族の専制政治から王政復古したネパールでは1959年2月、新憲法の下、初の総選挙が行なわれようとしていた。カトマンズにいたのは10日間だけだったが、政治的に開かれようとしているこの国にホウリーは深い関心を持った。そして「山を見ることも好きになった」。

香港から大阪、京都、東京、横浜とめぐり、船で帰米。ゴールデン・ゲートに入った時、「ここはいい国だが、ほんとうの世界ではない」と感じた。ゆつくりと時間が流れ、近代化への移行期の時期にあり、いい人たちがいる国、それがネパールだった。1960年9月、ホウリーは再びカトマンズに向かい、以後、その地に住みついた。

タイム・ライフ社の臨時通信員となったホウリーは、登山が国際的に重要なもの、と知る。幸いポカラに滞在していた登山経験豊かな英国大使館の軍アタッシェ、ジェイムズ・ロバーツ(トレッキングをはじめて導入した人として知られる)と知り合い、ヒマラヤについて学んだ。

1962年、ロイター通信に籍を移したホウリーは、以後あらゆる登山隊の取材を開始した。「最初の取材は、アメリカ、スイス合同隊のギヤチュンカンでした」。

2度目の取材は、63年春、エヴェレスト西稜をめざすアメリカ隊で、アメリカでは大ニュースとなった。

ホウリーの取材は、綿密だ。どんな登山隊もカトマンズに着いた以上、彼女の取材から逃げることは不可能だ。「ホテルに着いた時は、どこから聞き出すのか、すぐインタビュウしにやってくる。非常に熱心にデータを聞き取り、仕事ぶりに頭が下がります」と、最近、8千メートルに登り、取材を受けた女性登山家は言っていた。

チベットが解禁され、カトマンズ経由でチョモランマ、チョー・オユー登山が可能になると、北側からアタックした隊の成果を知るため、ホウリーは取材範囲を広げた。

カトマンズ暮らし44年、ヒマラヤ登山に関わる、全記録がこのようにして豊かなデータに集積した。

「素晴らしい登山家は、正直ですね」というのが、長年のヒマラヤ取材の感想。日本人では加藤保男、植村直己などが印象に残る、とこの時は聞いた。

は210km超になる。分水嶺上に登山道があるのは45km (44%) であり、残りは藪こぎの連続である。

3月下旬から残雪期の4月中旬まで5回試登を実施し、最終実施計画案を修正して支部総会に諮り、9月末まで分水嶺踏査を15回、踏査距離約72km (58%) を延べ93名が歩いている。10月以降に3回の踏査を実施し、今年中に踏査距離90km (72%) まで延長し、残り35kmは来年3月中旬から4月下旬の残雪期に踏査を予定している。

実際に歩いてみると、20m以上の垂直な岸壁に阻まれ撤退、再度ルート工作せざるを得なかったこともあった。地元で「熊の棲」と言われている番城山では、2mを超える密生したチシマザサに悪戦苦闘の藪こぎで、200m進むのに2時間を要する始末。さらにそこらじゅうに熊の糞があり、呼子を吹きながらの踏査であった。また、栗子山では、密生した雑木林のおかげで、平坦な山頂の判別に苦労させられた。つい30年前まで人馬の往来していた峠道は、車社会の進展により荒廃、今では峠の名称さえ忘れ去られ、分水嶺上に往時の面影をわずかに残すのみであった。

特に心を動かされたのは水中分水点の横川堰 (旧名: 助左衛門堰) である。横川堰は宮城県の入ナンバ沢 (横川上流) より給水して一枚岩沢に流し、更に一枚岩沢の水を加え、水路とトンネルで山形県上山市の寒沢 (萱平川) に流し農業用水として利用されている。賢者の知恵と執念、そして60年という歳月をかけて明治14年に完成した横川堰は、他県から農業用水を引いている全国唯一の堰であり、往時の苦労が偲ばれる。戦後60年、これまで無計画な森林伐採が行われてきたが、稜線沿いのブナの二次林は野性味あふれた自然に戻りつつある。山形支部は地元の山に腰を据え自然環境の現状を直視していきたい。 (渡辺 誠)



冷水山分岐から水中分水点に向かうチシマザサの藪こぎ

北海道支部

公募登山報告

十勝岳山頂、三角錐の岩峰を残陽が金色に染めるのを見上げながら、新妻支部長はしめくくった。「今日 (8月29日) の大成功は第1に天の利、第2に地の利、第3は人の和のおかげです」と。素晴らしい天候、美しい景観は人の力では、どうすることもできない。しかし人の和は、泥臭く、申して易く、行って困難なことである。それがまた、天候・景観に勝るものであったことを反芻しながら、輪になって、高村光太郎作詞「歩くうた」の大合唱となった。

北から石狩岳、トムラウシと来て、美瑛、十勝岳、そして上ホロカメトック、日勝峠の手前で西へ。この北海道の背骨の中でも今回の分水嶺公募登山は真に中心部を歩くものだった。支部はこの長大な背骨を区分し、各々その責任者を決めて、刻々と実施しており、今回は道東地区が担当であった。応募者が首都圏からの4名と少なかったことは意外であったが、支部からは支部長、長谷川事務局長、田島道東担当責任者をはじめ、14名が参加。前夜祭は十勝岳の懷に位置する白金温泉の白樺荘で行われ、支部会員心づくしの山の珍味が振る舞われた。

当日は早朝4時起床、登山口の望岳台まで車に分乗し、前夜宴席で支部長が提案した、(A) 美瑛富士と美瑛の鞍部で分水界に突き当たり、分水界をたどって美瑛岳、十勝岳山頂へ、(B) 十勝岳に直登し、ここでAとCを迎える、(C) 上ホロカメトック山経由で分水界を忠実に歩き十勝岳山頂へ、という3班集中形式での踏査実施となった。高曇りから時間の経過とともに大快晴となり、風もなく、360度の眺望は拔群の一日。それぞれ時間差はあったものの、支部長の待つ十勝岳山頂に無事集結、とっておきのビールやブランドで乾杯し、下山した。この時期の大雪地区の山は、リンドウ、岩ぶくろ、コケモモ、白たま等々、夏の終わりを告げる花々、そして早くも熟した実がびっしり付いた草木、火山岩の茶、這松の緑と想像以上に豊かな彩りのなか、楽しい山行であった。

北海道支部の分水嶺踏査は、アプローチなどを含めると実質2倍近いアタックが必要で、この2000kmに及ぶ長丁場を支部会員一丸となって実施中の様子がひしひしと感じられ、感動した。 (宮津 公一)



中央分水嶺踏査



総延長：5000km

踏査率：30.8% (2004.10.30現在)

東海支部

分水嶺の四季

東海支部の分担する分水嶺は権兵衛峠から野麦峠まで、おおまかにいえば木曾山脈の北部と飛騨山脈の南部を東西に繋ぐ山稜である。東西とはいっても、太平洋側の天竜川と木曾川の間へ信濃川上流の奈良井川が食い込んでいるため、その稜線は大きく屈曲して南北方向にも走る。稜線上の人とかかわりがある途中の地点はわずかに3か所、旧中山道が通る鳥居峠、以前は中京方面から上高地へのメインルートであった境峠、そして鉢盛山の山頂のみ。人跡稀な山域である。厄介な区間を割り当てられたものだが、通過困難な岩場などはなさそうだから、全区間を切れ目なく踏査することを前提に計画にとりかかった。割り当てられた76kmを15区間に分割し、それぞれにリーダーを委嘱した。

夏、未だ支部の態勢が整わないまま見切り発車、唯一登山道のある木曾駒北方の稜線を歩いた。当支部担当区間の最高標高点である行者岩から俯瞰すると、分水嶺の山並みは果てしなく霞の彼方まで続き、何処も深い森林に覆われて前途多難が予想される一方、やらねばならぬと決意を新たにさせられた。

秋、分水嶺踏査委員会を立ち上げ、顔合せを兼ねて取り付きやすそうな鳥居峠の北側をトレースした。途切れがちの踏跡はあるも、10数年前のガイドブックにハイキングコースとして紹介されていた高遠山付近は完全な藪と化していた。木枯らしが吹いてハラハラと降りかかるは初雪か、とよく見ればカラマツの落葉であった。このあたりは圧倒的にこの樹が多く、山は黄一色である。

冬、アプローチが難しくなる。稜線までの唯一の手

段はスキー場リフトだ。野麦峠スキー場というものの、峠とは遠くはなれた鉢盛山麓にある。スキー、スノーシュー、ワカンとさまざまないでたちで鉢盛山を往復した。

春、藪山の稼ぎ時、残雪期には何度も入山した。梢越しに純白の御岳、乗鞍、木曾駒の眺望を楽しみながら、藪こぎよりはマシだと思いつつ無名峰へ向ってラッセルに汗を流す。境峠から西の4区間、中継点に取り付けた標識。その標識が順次リレーされて最後に野麦峠へたどり着いたとき、ビニールに密封してあったにもかかわらず氷漬けになっていた。(堀 文昭)



秋の高遠山 (1463m)

山形支部

先人の面影偲ぶ分水嶺

山形支部が担当する中央分水嶺は、山形・宮城県境の関山峠から山形・福島県境尾根を経て米沢市板谷峠までであり、実質的な踏査距離は約125km(地形図上の平面距離は103km)になり、さらに各地点から分水嶺までのアプローチ距離85km超を含めると総踏査距離

報告

11月 Report

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です

自然保護委員会

自然保護全国集会 上高地で開催

自然保護委員会発足40周年記念、第30回自然保護全国集会是、9月10日(金)～12日(日)、その設立の原点とも言うべき上高地西糸屋にて開催された。北海道から九州までの各支部より、参加者は115名を数えた。40周年を期して、「日本山岳会自然保護活動のこれから」をメインテーマに、自然保護活動の歴史を振り返り、現在の活動を見直し、そしてそれらを統合してこれからのJAC自然活動のあり方を考える場になることを狙いとした。

10日は資料・映像委員会羽田委員長との協力を得て、80年前に撮影された貴重な山岳映像「昭和初期

の上高地」他の映画が上映される。

翌11日は午前中に地元信濃支部をはじめ11支部から活動報告があった。午後は、まず平山会長より力強い激励のことば(要旨は後記)、そして安曇村上松村長より、「自然環境保全条例を制定し村全体を護る活動をしている」との挨拶があった。続いて、映像構成の「日本山岳会自然保護委員会の40年」が元理事の山本良三氏、松本恒弘氏の解説により行われた。松方三郎会長を初代委員長として発足した委員会と全国各支部との連携による山の自然を護る数多の活動に、参加者よりあらためて敬服の声があがった。

後半は、「日本山岳会自然保護活動のこれから」をメインテーマにパネルディスカッションが行われた。はじめに話題提供として、

永年ジャーナリストとして活躍してきた江本嘉伸会員によるスライドを映写しながらの「モンゴルからの発信」があった。ヤクの糞まで燃料にしてしまう「モンゴルには使い捨て文化は存在しない」という話は高度文明に慣れきった我々に多くの示唆を与えてくれた。続いてパネルディスカッション、パネラーは、江本氏、山のECH O代表の上幸雄氏、会場の西糸屋山荘経営者で信濃支部会員である奥原幸氏、東京農業大学大学院生で東京農業大学エベレスト・ローツェ環境登山隊メンバーの下嶋聖氏、山岳会の同好会山の自然学研究会事務局長、関清氏。JACの自然保護はかくあるべきと、それぞれの立場から有益な意見が述べられた。それをうけて参加者からは熱心な質問、意見が出された。また芳賀副会長から、「山岳会の中には自然保護委員会は反対運動をする会かという意見もある。これは誤解である。私は、自然保護委員会がどんな素晴らしい事をしているかを、ここに参加している120人が6千人の会員に対して訴えなければならぬ、と言いたい。自然保護に対する関心が薄い

会員はまだ多い、ここで討議されたことを、声を大にして話すことが重要である」と話された。さらに環境省の前国立公園課長で中部地区自然保護事務所に着任したばかりの笹岡所長より、行政の立場からの率直な話を聞くことができた。夜の懇親会は、信濃支部より安曇節も飛び出し、差し入れの地酒と相俟って大いに盛り上がった。12日は絶好の天気恵まれ、分科会として3班に分かれ、信濃支部のリーダーによる焼岳登山、菊池俊朗氏の解説による上高地歴史散歩、山の自然学研究会案内の自

キナバル山(4095m) 8日間 ゆったり登頂と無人島の休日 1/16(日)～23(日) 188,000円	ゆったりアンナブルナ展望 9日間 トレックとエベレスト遊覧飛行 1/22(土)～30(日) 383,000円
ルートバーンとグリーン 11日間 ストントラック・グランドトラバース 1/24(月)～2/3(木) 455,000円	キリマンジャロ(5895m) 登頂とケニヤ山(4985m) 14日間 1/18(火)～31(月) 618,000円
ホテルシャンボチエパノラマ泊 9日間 エベレスト展望トレック 1/15(土)～23(日) 323,000円	北回り直行便で行くゆったり 11日間 キリマンジャロ登頂とサファリ 2/4(金)～14(月) 545,000円

山旅専門旅行社 アミューストラベル株式会社
 〒160-0022 東京都新宿区新宿2丁目6-4 K N 新宿ビル11階
 TEL: 03(5919)1188 FAX: 03(5919)1189

創立100周年記念事業にご協力を

●日本山岳会の自然保護委員会は、当時の会長松方三郎氏の提案により発足して40年になります。その頃は、1956年のマナスル登頂に刺激されて登山界は沸き、国内でも大学山岳部を中心としてより困難なルートを開拓するなど日本山岳会にとっては最も華やかな時代でありました。

これに対し自然保護はいまだマインナーな存在でした。そのような時代に現在の自然保護を予見された山岳会の先達の先見性には、頭が下がる思いがします。今日、自然保護は本会の重要な活動として認識されるようになってきました。白神山地のブナ林再生事業、高尾の森づくり、猿投の森づくりなどは、日本山岳会だからこそでできる

平山会長の挨拶要旨

自然観察会が行われた。最後に、運営全般に惜しみなくご協力くださった信濃支部ならびに山研委員会、資料・映像委員会、アルパインスケッチクラブ、山の自然学研究会の皆さまに厚く御礼申しあげる。

自然保護であると思います。

●日本山岳会における自然保護活動は登山と対極にある大きな事業であると考えます。

最近の新聞に、日本は自然保護の先進国という記事が載っていました。ヨーロッパが自然保護の先進国とされている人が多いようですが、実は日本の方が大先輩なのです。西洋は森林を伐り拓くことで文化を育てましたが、日本は木を植えることで文化を育て、森林と人間が深く関わりあひながら自然を守ってきました。自然を守るということとは、自然をただ野放しにすることはなく、自然の再生サイクルに人間が積極的に参加し、その恵みを受けると同時にその恩に對してお返しをすることであると思います。日本人は今まで誰よりも国土を愛し、自然と共生し、四季を愛でてきた国民だったと思います。この日本人の感受性こそ美德として受け継いでいきたいと考えております。

●篠崎理事から紹介されたように、日本山岳会の定款には会の目的と

して「自然愛護の精神」が、そして会の事業として「自然保護活動の推進」が明記されており、自然保護活動は登山とともに山岳会の大きな柱のひとつであるべきです。今、山岳会は創立100周年を迎えるにあたり、長期目標検討委員会において山岳会のあり方についての検討がされておりますが、その中に登山とともに自然保護は重要な柱のひとつにすべきだと答申されています。

この美しい地球を子孫に残すことがこれからの大きな課題になるはずで、そのために、我々はあ

るいは日本山岳会はどうしたらよいのか、この全国集会の討議が実現するものであることを祈ります。(熊野 将)

山研運営委員会

山研プチ・オータムコンサート

平成16年度山研プチ・オータムコンサートが9月18日(土)、山研運営委員会主催で、上高地の山研で催された。当日はシトシトと秋雨が降っていたが福岡県から7名、新潟県、石川県、千葉県、東京都

ユングフラウヨッホにいちばん近い村、ウェンゲンの家庭的なホテルアイガーと、スイスの旅の専門店アルプスウェイが自信をもってお勧めする共同企画。

アルプスウェイご利用で、ホテルアイガーにお泊まりの日本山岳会会員様へ4つの特典。

1. ユングフラウのよく見えるお部屋を優先的にご提供。
2. 民族料理フォンデュをご滞在中の夕食に1回ご用意。
3. アルプスウェイ駐在員による1日の専属ガイドサービス。
4. ホテルのオーナー、フックス氏より地元産リキュールをプレゼント。



あなたのスイス旅行を、このホテルアイガー滞在を組み入れてご用意します。

お問合わせ
お申込みは **アルプスウェイ**

<http://www.fellow-travel.co.jp/>

〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂2-16-8 ビジネスヴィップ渋谷ビル4F

Tel.(03)5489-9541 Fax.(03)5489-6300

e-mail alpsway@fellow-travel.co.jp

〒530-0002 大阪府大阪市北区曽根崎新地2-3-13 若杉大阪駅前ビル6F

Tel.(06)6347-8984 Fax.(06)6347-8986

e-mail osaka@fellow-travel.co.jp

主催：株式会社 **フェロートラベル** ボンド保証会員

国土交通大臣登録旅行業664号 協賛：ウェンゲン観光局・ツェルマット観光局 後援：スイス政府観光局



等全国から26名の方々が集合した。コンサートは今回が7回目である。第1回は1998年9月26日に開催され、バイオリンとシンセサイザーによるクラシック音楽会であった。第3回から演奏者が変わった。

「チロル音楽の夕べ」として、アンサンブル「ヤーガ・ハイッスル」の演奏となった。演奏は永谷義篤氏のチター、手回しオルガン、ヨーデルと鈴木啓之氏のアコーディオン、トランペット、ビュッヘル、アルプホルン、ターラシュビンゲン(コイン回し)、鈴木夫人のアコーディオン、カウベル大中小18個による演奏とまことに豊かな楽しい演奏会となった。

「シェフ」坂本委員をはじめ山研委員手造りのディナーとワインを賞味して、大いに盛り上がった。その余韻がまだ残るなか演奏者3人それぞれチロル地方の民族衣装を身に纏い、山中のコンサートにふさわしい雰囲気が始まった。チターソロによる「カッコーヨーデル」「ツァイザル」「農民のメヌエット」「第3の男」と続く。「第3の男」は映画ではアントン・カラスが演奏し、キャロル・リード監督が白黒のフィルムで描き出す魔

墟のウィーンの町に繰り広げられるシーンが次々と思ひ出された。ジョセフ・コットン、オーソン・ウエルズ、アリダ・バリの名演技がチターの調べとともに浮かび、遠い青春の1ページだった。

感嘆の歓声があがったのはカウベル大中小18個による演奏だった。鈴木夫人が自由自在に操る18個のカウベルから演奏されるメロディに拍手が鳴り止まなかった。面白かったのは「ターラシュビンゲン」の中に5フランのコインを入れての演奏だった。アルプホルンの豊かな音色はチロル地方ののどかな山並を髣髴させた。全員で「アヒルのダンス」を踊って当夜の演奏会は終わった。

翌日朝食後のお目覚めコンサートで、チターソロによる「雪のワルツ」、手回しオルガンでヘンデルの「水上の音楽」を聴いて解散となった。夜来のもも上がり、山へ行く人たちはまたの再会を約して出かけて行った。上高地まで多くの楽器を持参して演奏された3人の演奏者、小川理事をはじめ山研運営委員の皆様、お世話してくださった方々、管理人の木村夫妻に感謝申し上げます。(小田 薫)

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況をレポートします。

秋田支部

大平山記念集中登山

秋田支部の設立45周年記念登山の第2弾は、6月27日、進藤、佐藤の両顧問始め、総勢32名の参加会員のもとに、秋田市のシンボル霊峰・大平山において実施した。大平山(奥岳・1170m)への登山コースは11か所あるが、今回は会員それぞれ好きなコースから自由に登り、奥岳山頂に正午ごろまでに集合するものとし、最近では珍しくなった集中登山形式として計画してみた。

結果は、木曾石、野田、軽井沢、宝蔵、旭又、萩形の6コースから登り、予定の通り正午には、旭又



大平山頂にて

残留組をのぞく参加者全員が晴天のもとに奥岳山頂に集合した。

山頂に鎮座する三吉神社では、田村宮司より記念登山のお祓いを受け、名物の大盃でお神酒を乾した後、鈴木(裕)会員作成の記念幕をバックに記念撮影。続いて、隣接する参籠所において若月チーフリーダーの進行のもとに記念祝賀会を開催。支部のさらなる発展を祈念し、和気あいあいに親睦を深めあった。

下山は木曾石、旭又、赤倉、萩形(沢と尾根)の5コースに分かれてそれぞれ帰途につき、記念集中登山は無事終了した。

(佐々木 民秀)

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします)



イラスト・宇都木慎一

奈良原町子さんの死を悼む

村井 葵

10月1日、奈良原町子さんが脳出血で倒れたと聞いて耳を疑った。6月8日の小倉茂暉さんの告別式では弔問客を精力的に接待していたからだ。彼女とは学生の時から45年のつき合ひであった。

才色兼備、早稲田の女子部のなかでも際立つ存在であった。現役の頃は女子部の全盛時代であった。僕も引率者として夏山の縦走など何度か行動をとりにしたことがある。戦場さながらの過酷な日々ながら、彼女はリーダーとしてみごとに采配を振るっていた。男まさりの一面もあった。

日本山岳会の「会報」の編集にも長く携わった。僕の前任の伊藤敏さん、後任の今村千秋さんを合わせると延べ10年間を山岳会に奉仕したことになる。編集の才覚は群を抜いていた。

僕が担当した4年間は月に1度松庵の小倉邸に集うのがならわしであった。小倉さんと董子夫人も加わり、議論を重ね、内容の骨子を固めていった。「読み応え」と「クラブの活性化」を目指した。充実した楽しいひとときであった。そのときの2人が競うように逝ってしまった。

彼女の住まいは小倉邸の近くにあり、小倉夫妻とは深い交流があった。倒れる少し前の稲門山岳会報に「小倉さんの「まあナ」」と題して追悼文を寄せている。読

み返してみると胸が痛む。小倉さんを敬愛し、女子部第1号の先輩の董子さんをブーちゃんと呼んで憚らないつき合ひであった。

彼女は時には長尾ドクターらと中央アジアの探検に出、またある時は夫君の武士さんとエルミタージュ美術館への旅を愉しんでいた。僕もヨーロッパ・アルプスに誘おうとしていた矢先の訃報だっただけに残念である。

人も自然も森羅万象のすべてが次元の差こそあれ、生成消滅の流れのなかにある。人がこの世に生まれてきたのも、この世から去る

のもひとつの流れという波動にすぎない。理屈ではそれがわかっていても達観とか悟りからは程遠い自分を知るばかりである。同時代をとともに過ごした仲間を失うという現実は、限りなく淋しく辛いことだ。

最近のシエルパ事情

藤井 正善

昨年と今年の2回にわたる、JAC事業委員会主催のシニア遠征隊(カンگریシャルとテンギ・

おれ にんげんたち

——デルスー・ウザラーはどこに——

黒澤明が感動したように、デルスーに魅かれて



探検家アルセニエフの生涯とその足跡をウスリーのタイガにたずね、デルスー像の検証から、二人の友情、自然と人間のかかわりを豊富な資料を駆使した巧みな筆致で探究する。

岡本 武司 著
四六判 220頁 1,890円(税込)

カラコルム・ヒンズークシュ 登山地図

〔付〕カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究

A4変型判 上製美装ケース入
385ページ B全判地図13葉
宮森常雄(秩父宮記念山岳賞受賞)・
雁部貞夫 共著 ・カテゴリーをご購下さい

◎好評発売中!!

34,650円(税込)

ナカニシヤ出版

〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15
Tel.075-723-0111 Fax.075-723-0095
URL <http://www.nakanishiya.co.jp/>

ラギ・タウ」に参加し、昨今のシエルパたちの気だてや様子が、最近ずいぶんと変化していると感じた。私のような、70年代に昔のシエルパと一緒に登った中高年登山者から見ると、特に20から、30歳の若いシエルパの気質が、大きく変化してきていると思える。

今年の遠征隊でも昨年と同一のサードが雇用され、クライミンググシエルパも5名のうち、2名のシエルパは同じ顔ぶれであった。従って、隊員との意思疎通の問題もほとんどなく、彼らの強力な体力的サポートには感謝した。ターメ出身のサードは40歳で、登攀経験も実績も十分で、マネージメント能力にも秀でた申し分のない人物であり、彼に忠実な若手シエルパ3名を連れて来ていた。

特筆に値すると思われることに登山中出くわした。C2からのルート上に立ちほかかる急峻なランモチエ・リ(6400^{メートル})の雪氷壁が登れず、次のルートを検討している時に表面化したシエルパ世代間の心理的ギャップに注視してみたい。ルート工作に行き詰まり、C2に帰幕した際、サードと代替ルートの可能性を話し合った時

のことである。彼の言葉によると、「今日のルート開拓にあたって、ザイルトップを努める若いシエルパに、下から見て左頭上にあるハングング・グレッシヤーの割れ目を目指して、左へ、左へ、とルートを伸ばすよう指示したのだが、実際はヒマラヤ襲間の1本のルンゼを真上に向かって登ってしまい、最後は岩状スラブで行き詰まってしまった。最近の若いシエルパで、7千^{メートル}峰を登れる者は数少なくなつてしまった。皆、8千^{メートル}峰の有名な山の遠征隊に行きたがる。その方が楽だし、収入もよく、彼らのキャリアにも箔がつくので魅力である」と。

この言葉を聞いた時、私がショックを受けたのは、カタログヒマラヤ登山の影響が、我々のみならず、すでにシエルパの領域にまで達している事である。サードの言う、7千^{メートル}峰が登れないとは、未踏のルートが登れない、ということであり、古い世代と新しい世代の中間に位置する彼にとつて(サード役にとつて)、難しい課題となりつつある様子であった。

このことが気になって、下山後、マガール族現地人と話をしたとこ

ろ、「エヴェレスト等の商業遠征隊に参加して、サウスコルに1回登ると、3千から5千^{メートル}のボ

ーナスが支給され、個人装備も外国から持ち込んだものが支給される等の特典があり、エージェンシー経由の小さな遠征隊には、あまり魅力を感じないでしょう」と言われた。確かに、支給装備に関しては、今後、解決すべき課題であろうと思われる。エージェンシーを通じ、登山許可の申請・入手から隊荷の通関や、シエルパたちの雇用まで包括する契約が普遍化する今日、シエルパへの個人装備支給規則も、エージェンシーが8万^{ルピー}を支払い、隊の代理履行をしているのが現状である。従って、シエルパたちが身に着けている装備のほとんどはかなり老朽化しているか、現地産の粗悪コピー商品のものが目立った。隊にとつては、この包括契約方式のほうが経済的かもしれないが、時間経過に伴って、シエルパの安全性をも脅かす一因となるかもしれない。さらに、シエルパへの給料支払いも、エージェンシーとシエルパ間での契約となっており、一方でシエルパ特有の仲間外れにしないという文化

背景を考慮すると、隊としては成果報酬等の雇用政策も立てにくくなっている。

このような、シエルパにとつて不利な状況は、雇用の需給関係が改善しない限り、エージェンシー側に有利に働くことになる。ネパール政府は観光産業発展のため、トレッキング・エージェンシーの振興策を採っているつもりかもしれないが、私には、その恩恵配分はシエルパには少なく、中間業者のエージェンシーに大きくなる仕組みとなつていると思われてならない。それにしても、最近の若いシエルパの登攀技術の向上には目を見張るものがある。ノルウェーが主催するネパール現地でのクライミングスクールや、フランスの登山家によるアルプスでのクライミング訓練が、彼らのレベル向上に寄与しているのではないだろうか。また、一部のシエルパには、読み書きの語学能力も備えた文武両道に長けた者が認められ、ますますグローバル化する環境に対応してゆく姿勢が窺える。エヴェレスト街道のロブチェにはディスコテイクまで出現し、ポーターまでもがディスコで踊る昨今である。

Climbing & Medicine・39

遺伝子に負けないために

上小牧 憲寛

本コラム欄も40回目を迎えようとしています。コラム欄は医療委員会のHPで通覧できますが、その中で、私がもっとも興味を惹かれたものは、大野秀樹氏の「登山隊員は遺伝子で選別される?」でした。アンギオテンシン変換酵素(ACE)の遺伝子型II型の登山家にはエヴェレストに無酸素登頂できる人が多いが、DD型の登山家の中には無酸素登頂できた人が1人もいないという報告です。

私の住んでいる栃木県でもACEの遺伝子型を調べてみました。DD型の人には登山家の中にはなかなかいませんでした。ところが、何と私自身の遺伝子型がDD型だったのです。それからというもの、ACEについて研究をしました。その結果、私の考えは次のようになりました。

まず、初めに登山家とACEの話始めたMontgomeryらによれば、ACE酵素活性の高いDD型が高所に登れないのは、持久力が劣るからだそうです。しかしその後の研究者の報告は、DD型は持久力がないという報告と、あるという報告は、概ね半々です。DD型である私自身、栃木県内の駅伝に出場し、2回区間賞を取ったこともありますし、昨年は登山マラソンで青年の部で2位になりました。DD型に持久力がないという意見には賛成できません。しか

し、DD型が高所に弱いという意見は否定しません。1998年、ムスターグ・アタ(7456m)になんとか登頂できた私は、視力低下に陥り、凍傷と低体温症を患って、皆に迷惑をかけたからです。

では、DD型の人はどうしたら安全に高所登山を楽しめるのでしょうか。大野氏が書かれている通り、ACEには様々な働きがありますが、総じて血管を収縮させる働きがあります。つまり、ACE遺伝子がDD型の登山者では、血管を収縮させる機能が強いと考えられます。私はそれが高所で悪さをするものと考えています。そこで、血管を拡張させるようにすると、ACEの良くない効果を減弱させられると推測したのです。

ボディービルダーはコンテストの前にサーキット・トレーニングをすると聞いたことがあります。骨格筋内の血管が拡張し、筋肉がよりたくましく見えるようになるからだそうです。つまり、骨格筋の有酸素運動は筋内の血管を拡張させるのです。高所登山を目指す私もサーキット・トレーニングやランニングを欠かしません。

もし、それでも不十分ならば、ドーピングかもしれませんが、血管を拡張させる薬剤を内服するという手もあります。現在、高所肺水腫の第一選択薬となっているのが血管拡張作用の強力なニフェジピンですが、ACE阻害剤やアンギオテンシン・レセプター・ブロッカー(ARB)がDD型の登山者の高所障害に有効なのではないかと私は考えています。しかし、これはあくまで仮説で、証明された訳ではありません。強調したいことは、遺伝子型で駄目と決めつけるのではなく、良くない遺伝子を持っていても登るためには何が必要か考えるべきであるということです。

平成16年度「海外登山基金助成登山計画」募集

海外登山基金委員会

日本山岳会は登山界の活性化を目指して優れた海外登山計画に対して「海外登山基金」による助成を行っています。16回目となる今年も、困難を求めている挑戦、発想の刷新、夢多い計画などユニークな登山計画を支援したいと考えています。登山といっても多様なスタイルと発想があります。単に頂上を目指すにとどまらず、新たな課題を発見すること、新世紀の登山にとって大事なことでしょう。バイオニア精神に溢れるさまざまなジャンルの挑戦を歓迎したい、と考えます。単独、パーティーを問いません。奮ってご応募ください。

●対象 平成17年2月1日～18年1月末に海外の山へ出発する登山隊。

●申込方法 所定の様式(本会事務局に請求ください)に記入し、登山計画書(15通)を添えて申請ください。

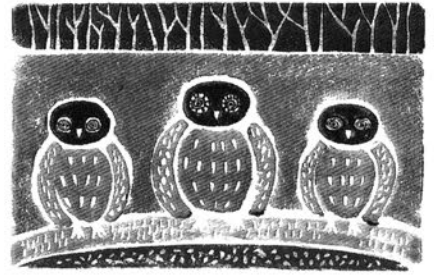
●申込締切 平成17年1月15日

●審査と助成期間 平成17年1月中旬に審査、2月の理事会で決定し、助成。なお、対象となった登山隊は後日、登山報告をお願いいたします。

●助成金総額 160万円

*問合せ・申込 日本山岳会事務局まで

図書紹介



幸せを呼ぶ鳥 版画・奥野漢石

『谷川岳の自然』

齋藤晋・著

山登りも多様化してきて、いろいろの登山があるようだ。本書の内容を反芻しながら谷川連峰を登ることも、山の楽しみではないだろうか。写真を撮る、スケッチをする、植物を楽しむ、などのように、である。山で目の前の登りを闇雲にやつつける、それは時代も年齢も、われわれ中高年の山登りには過ぎし日のことである。

著者は谷川岳とその周辺の自然を研究対象としてきた。学者のその膨大な蓄積と比べて、一般の中高年登山者が、同じことはできないに決まっている。それにしても、

この本を片手に、地形や地質、動植物のことを観ながら登ってみたら、どんなに楽しいことだろうか。そのようなことを思い巡らせてくれる本だ。谷川岳を中心にした山の学術的な業績、書名、年度なども記載されていて、著者の野心も伝わってくる。(大船 武彦)

2004年2月 上毛新聞社発行 300頁 1600円

『Women on High-Pioneers of Mountaineering』

Rebecca A. Brown 著

「なぜ山に登るのか」、とりわけ自然を相手に命のやりとりが求められる、パイオニアとしての登山を志す人間の心には、どのような思いがあるのだろうか。

本書は一九世紀の初めから二〇世紀の半ばにかけて、第一線で活躍したヨーロッパと米国の女性登山家の記録や社会背景を、彼女らの心情を交えて紹介している。

「女性性は男性の庇護の下でしか生活できない」と考えられていたビクトリア朝時代。男性の間で繰り広げられたスイス・モンブランの初登頂争いは1786年に収束し

たが、それから22年目の1808年、女性として初の登頂に成功したマリア・パラディス。驚くべきことに、コルセットとロングスカートを身にまとい、女性初登頂を計画した男性たちに請われての登頂だった。彼女は成功を機に名声と金を得たが、一方でその功名心とも受け取られる動機に対して批判を浴びねばならなかった……。

そのほか、自分の意志で登山を志し、情熱に突き動かされるように山へ傾倒していったヘンリエッタ・ダンジェビルやルーシー・ウオーカ。社会的通念を打ち破り、批判にも負けずに思いを貫き通した生き様が印象的だ。二〇世紀に入り、ヒマラヤやアラスカなど空白地帯に情熱を傾けたファニー・B・ワークマンやドラ・キーン。

社会を巻き込んで夢を実現させていく、ひとりの探検家としての思いと力量を垣間見ることができ、著者のレベッカ・ブラウンは、米国・ニューハンプシャー在住の作家。自身もアウトドア活動を愛好し、自然や環境問題をテーマにした執筆や『The Courier』誌の編集長を務める。

(恩田 真砂美)

2002年 The Globe Pequot Press
発行 258頁 22・95^{u.s.}

舟橋栄子・編

『アコンカグアの白い風』

ネパールをトレッキングしたときのことだ。パーティーのなかに、とびつきり元気な女性がいた。薄い空気のなかをビデオ撮影のための重い機材を担いで走り回っていた。舟橋さんだった。しばらくたち、キリマンジャロに挑戦したと聞いた。今度はアコンカグアを走り回ったようだ。

南米の最高峰、アコンカグアへの登頂記録である。2002年から3度の挑戦で、ことし1月、ようやく登頂した。6^キにもなるビデオ機材を担いでの登頂である。同行した仲間が共同執筆し、それぞれの体験を綴っている。訓練のため60^キマラソンを完走した話。途中で手首を骨折しギブスをつけて登った話。みんな高山病に苦しみながら、長大な砂礫の斜面を黙々と登った。そこに登頂への執念を感じた。

登山基地となっているメンドーサで民宿を経営している増田四郎

図書受入報告 (2004年9月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入別
菊地敏之	我々はいかに「石」にかじりついてきたか: 日本フリークライミング小史	295pp/19cm	東京新聞出版局	2004	出版社寄贈
工藤隆雄	北八ヶ岳 花守記: しらびそ小屋主人の半生	269pp/19cm	東京新聞出版局	2004	出版社寄贈
梅棹忠夫・山本紀夫(編)	山の世界: 自然・文化・暮らし	344pp/21cm	岩波書店	2004	編者寄贈
羽田栄治(編)	山・旅・映像: 私のフィルムから	/26cm	羽田栄治(私家版)	2004	発行者寄贈
勤労者山岳連盟(編)	日本勤労者山岳連盟 第26回総会、第1回評議会 決議・決定集	203pp/30cm	日本勤労者山岳連盟	2004	発行者寄贈
早津忠保	四季 十津川: 紀伊山地十津川村の自然(写真集)	134pp/25cm	光村推古書院	2004	著者寄贈
村上いちの(編)	近畿山岳愛好会 創立30周年記念誌	89pp/26cm	近畿山岳愛好会	2004	発行者寄贈
皆子山岳会(編)	みなご 創立50周年記念誌	112pp/30cm	皆子山岳会	2004	発行者寄贈
北中康文	日本の滝: 東日本661滝(ヤマケイ情報箱 第1巻)	431pp/21cm	山と溪谷社	2004	出版社寄贈
岡本武司	おれ にんげんたち: デルスー・ウザラーはどこに	206pp/20cm	ナカニシヤ出版	2004	出版社寄贈
ヒマラヤ保全協会(編)	3ヶ年計画(2001-2003)終了時評価報告書「森がよみがえった!」	90pp/30cm	ヒマラヤ保全協会	2004	発行者寄贈

アコンカグアの白い風

西半球最高峰 6959m アンデスを知りたい人に
12名の証言による詳細なガイドブック
山と溪谷社 B5 200頁 2000円 (好評重版)

ご注文は 発行者代表 舟橋栄子へ
〒168-0082 杉並区久我山 3-8-16 Tel 03-3504-0717
Fax 03-3504-0715 Tel 03-3332-5797 (夜間・休日)
郵便振替 00110-0-408278
加入者名 アコンカグアの白い風

さんが寄稿されている。植村直己さんや、長谷川恒男さんが宿泊したときのエピソードを披露されていて興味深い。増田さんは「登頂に伴うビデオ撮影は、南壁の冬期単独登攀に次ぐ偉業」と評した。編著者の「元氣印」がよほど印象に残ったに違いない。

日程、費用概算、食料計画、会計報告などのデータも掲載されていて、ガイドブックともなっている。(高橋 重之)

2004年7月 山と溪谷社発行
B5版 2000頁 2000円

会務報告

9月理事会

日時 9月8日18時30分～20時30分
場所 日本山岳会会議室

「出席者」 平山会長、芳賀、平林、橋本各副会長、藤本、今村、小川、朴元、賛田、田村、鈴木、野口、石田、篠崎、鳥居各理事、内田監事、宮崎、鰐坂、西村、小倉(董)、重廣各常任評議員
「委任」 黒川、大蔵各理事、一力監事

【審議事項】

- 1 長期目標検討委員会提案事項の件 平山
- 実行に移す方向で検討する。
- 正副会長で具体化のためのスケジュール案を作る。
- 理事会とは別途本件だけの検討会を行う。
- その他提案事項はメモで会長へ提出。

(承認)

- 2 100周年記念事業募金計画 芳賀

5月の理事会提案の募金案と一部変更がある。有力会員の募金で1万円×100名は、2万円×1

00名とする。また、大学山岳部OB会の募金は、大学山岳部への募金と訂正する。早急に募金趣意書および申込書を作り配布する。

(承認)

- 3 100周年記念事業予算 橋本

実施予定の項目に落ち度がないかを再検討し、収入および支出について意見を求め、新予算案を作成し、再度理事会に提案する。

(承認)

- 4 織内氏、福田氏のビッケル寄託の件 鈴木

大町山岳博物館への寄託

- 5 高峰登山調査用紙統一に関する広告出稿の件 藤本

山岳4団体で広告を山と溪谷、岳人に出稿する。当会で6万1千円負担する。

- 【報告事項】

以下の件が担当者より報告され承認された。

- 1 会報「山」9月号の内容 今村

K250周年がトップ記事である。なお、フィスコ・マラーニ氏の追悼文について、在フィレンツェの谷氏にマラーニ氏の遺言を掲載しなかったことについてお詫び

をした。また、白神山地と猿投の森について題目と本文が逆になっていた件についてもおわびをした。

- 2 台湾玉山登山招待 藤本

日本山岳会から岐阜支部の会員などが参加することとなった。

- 3 2006年度支部懇談会案内 藤本

別紙のとおり3日間で案内が来ているが、2日間にまとめるよう福井支部に申し入れた。

- 4 日本勤労者山岳連盟隊K2に登頂 藤本

8月7日、4名が登頂に成功したとの連絡が当会に入った。

- 5 日本山岳会会旗を支部へ配布 藤本

宮崎支部より要請があり、有料配布とする。現在総務委員会で見積り依頼中。

- 6 東京都山岳連盟耐久レース後援依頼 藤本

名義後援承認

- 7 「山岳」記事転載依頼 藤本

①同志社大学山岳会、②名溪堂、それぞれ承認

- 8 学生部ムスタン遠征報告 鳥居

マオリストによる影響もなく、予定通り行動中である。9月には

山の本の古書店

在庫目録年2回(5月・11月)発行
ご希望の方お申込ください。

ご蔵書を整理するときはぜひ弊店に!



古書買入

晴山書房

東京都中野区上鷺宮4-6-3

TEL&FAX 03(3990)4540

結果判明。

- 9 日本ヒンズークシユ・カルコム会議開催の通知

- 10 その他

- ①自然保護全国集会 篠崎

9月10～12日、上高地にて参加者約1000名で盛大に行われた。

- ②関西支部70周年・日本山岳会100周年の西チベット学術登山隊 平林

2004 9月3日、パチュムハム初登頂成功。河口慧海ルート確定と踏査成功。引き続きギャンゾンカン等登山中。

INFORMATION



イラスト 宇都木慎一

◆100周年記念シンポジウム
「山での突然死を考える」

日本山岳会医療委員会

登山者の高齢化に伴い問題となっている山での突然死の増加、医療委員会では100周年記念事業として、突然死についてのシンポジウムを開催します。国内外の突然死症例の死亡原因などについて話し合う形式で行います。わかりやすく、今後に役立つ内容ですので、一般登山者、医療関係者、ガイドの方など、ぜひご参加下さい。

日程 2005年1月20日(木)18時30分～20時30分

場所 東京体育館(JR千駄ヶ谷駅前)(入場無料)

申込 12月末日までに氏名、会員番号、連絡先を記入のうえ、FAX、メール、はがきで以下宛(〒102-0008

1 千代田区四番町5-4
日本山岳会医療委員会

FAX 03-3261-4441

E-mail: jacnined@yahoo.co.jp

*座席に余裕があれば当日申し込み可。

問合 FAXかメールで医療委員会・野口いづみ(TEL 042

4-63-2871) E-mail: jacnined@yahoo.co.jp

■会員異動

物故

崎田 熙 (3084) 04・4・22

富田健一 (1615) 04・7・24

川津鐵禮 (4929) 04・7・28

松井美恵子 (9249) 04・9・19

島根康郎 (4254) 04・9・25

退会

山中 茂 (5417)

島津慶子 (5540)

川見博美 (8925) 京都

終身会員

市川次良 (5068)

改名

小島淳子 (11291) ↓坂下淳子

ルーム日誌 9月

1日 アルパインスケッチクラブ

山岳地理クラブ

ビールパーティ

2日 自然保護連絡会議

6日 総務委員会

7日 常務理事会 図書委員会

スケッチクラブ

8日 理事会 休山会

山想倶楽部

山の自然学研究会

10日 01会

13日 資料・映像委員会

アルパインスキークラブ

14日 山研委員会 事業委員会

二火会

15日 三水会

16日 科学委員会 100周年

フォーラム委員会

ゆきわり会

18日 SUN燦会

21日 百年史委員会

インターネット小委員会

00会

22日 新日本山岳誌

24日 100周年式典委員会

28日 常務理事会

自然保護委員会 九五会

山遊会

29日 アルパインスキークラブ

30日 青年部

9月来室者567名

◆編集後記◆

●今年は台風の上陸数が観測史上最高となり、各地で大被害が出ました。また先日の新潟県中越地震では小千谷市などを中心に大変な被害を出し、まだ余震が続いています。会員および関係者にも被害に遭われた方がいらっしゃると思いますが、お見舞い申しあげます。

●学生部の「ムスタン遠征」は今月号の巻頭にあるように無事終了し、関西支部の「西チベット学術登山隊」もパチェンハムなど2峰の初登頂と河口慧海の足跡調査等、当初の目的をはたして帰国しました。

●来年はいよいよ会創立100周年の年です。各支部にお願いしている中央分水嶺の踏破のほか、会員公募のマナスル登山もあります。会員全員で記念行事を盛り上げましょう。

(今村 千秋)

日本山岳会会報 山 714号

2004年(平成16年)11月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 平山善吉

編集人 今村千秋

Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社